

新宇宙戦争

オーガスト

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

中央暦1639年突如宇宙から奴らがやってきた。

そいつらは異形の姿をしており目に見えない攻撃をし未知な兵器を繰り出しそして我々を喰らいだす。

世界は各々と、そして連帯し奴等をこの星から排除できるのか。

※この作品は『宇宙戦争』ならびに仮想戦記シリーズ『宇宙戦争1940』と『日本国召喚』を合わせた二次創作となります。

目次

侵略軍

宇宙からの侵略者

接触

壊滅

絶望

変わりつつある情勢1

変わりつつある情勢2

1

7

14

23

28

侵略軍

宇宙からの侵略者

「何故だ！何故日本が召喚されない!?!」

太陽神シユマシユは叫んだ。

彼女の前には鏡の様なものがあり、それに映っているのは彼女が見守る世界の一つ。

その世界は魔法の文化があり、人々が暮らしているものであった。

しかし争いが絶えることがなく国々が支配を広めている。

今は名が無き豊穡の神が愛していた国は隣国に支配され惨殺され、残る者はレジスタンスとして活動を続けている。

本来なら既に眷属である日本国が近くに召喚され、まだ国が残っているはずだが未だにこの世界に召喚されない。

いや出来ないのだ。何かに妨害されているかのように。

「なぜだ…なぜなんだ」

彼女が、頭を抱えて考えていると、勝手に風景が変わった。

映っているのは星全体、宇宙だ。

「これはいったい……はっ！」

彼女は広がってる宇宙の中、一つの大きな物体を見た。それは楕円形で大きな宇宙船でありそれから一つ何か星に向けて射出していった。

「あれはもしや……奴等か！」

彼女は曳光を描く物体とその宇宙船を睨み付けてそう言った。

彼ら二度地球を侵略した集団を……

中央暦1639年9月25日明朝、フェン王国の首都アノキは賑わっていた。

この日は五年に一度に開催される軍祭が行われており各国の武官が参加されていた。今日はこの軍祭と別のことで賑わいが起こっている。

「ほう、あれが昨日飛んできた物だな」

フェン王国の剣王シハンは城から単眼鏡を覗きこんだ。

彼が見たのは首都より外れた場所にあり、大きさは民家よりも大きい円柱の物体だ。

報告によればおよそ27メートルもあるようで現在専門家が調べている。

「もしやパーパルディア皇国の兵器ではないでしょうか」

側近の剣豪モトムがそう言った。

「パーパルディア皇国とは既に最後通牒渡されており何時攻めてくるのかわからない状況だ。

もしあれがパーパルディア皇国の兵器だとしたらすぐにも民を避難させなければならぬ。

「何が起きるかわからない、異変があればすぐに報告をせ——」

よ、とシハンが言った瞬間に円柱から光が発し、目の前から熱波と言えるほどのものが城その物を包んだ。

「これが……隕石!?!」

少し時間は遡り、円柱物体周辺に民や観光客、武官達が囲んで騒いでいた。

その中の一人、第二文明圏列強ムーのジャーナリスト、ハミラはおよそ27メートルもある円柱に写真機を向けて魔導写真撮影をする。

本来彼は伝統的な軍祭を取材するためにわざわざ水上にて着水可能な飛行機械を使つてきて来たのだが突然落ちてきたこの物体の知らせを聞いてこの場に来たのだ。

「しかしこれはなんだろうか」

写真を撮りつつ観察をするがまるで人工で作られたかのような精巧な円柱であり隕石の様には見えない。

「何かの入れ物か？」

ミハラはそうつぶやくと羊皮紙をもつ一人の男が隣に近寄る。

「そう！これは隕石ではなく神の使者の方舟だ！私は昨日見ました！遙か上空からこれが降ってくるのを！それも何回もだ！天から来た、つまり神の使者が来たのです！」

周りの人はざわめく。

遙か上空、それは宇宙と呼ばれる空間を指しておりムーではまだそこまで到達しておらず一部では神の領域ともよばれている。

確かこの星には神と魔帝に纏わる話や太陽神の使いの伝説の話があった。

ジャーナリストととしては滑稽で信じがたい話ではあるがこの第三文明圏では有名な話である。

「つまりこれは……」

「そう、これは最初の接触、神の使者が我々を救つてくださるのだ！」

男がそう言うのと円柱のてっぺんから蒸気が沸きだし隙間が生じる。皆は唾を呑み込み、震えあがる。ミハラは無意識に写真を何枚も撮る。その隙間から姿を見せる異形の姿を。

「ハ、これが神の使者……!?」

醜悪、神々しい使者ではなくむしろ悪魔の使者に見えた。

触手が隙間から姿を表し更に目玉まで出て来てこちらの様子を伺っている。

「か、神の使者だ！」

神の使者と呼ばれる異形の化け物は目玉を使い周囲を見渡す。

神の使者であるのなら私でも大スクープだ。

逆にそうではなかったら……

目玉から機械音、シャッターのフラッシュによる電気が溜まるような音が鳴り響き

……

「……え？」

瞬間男の上半身が消え去った。

どざりとさきほどまで男であつた身体は倒れ皆に悪寒が走る。

ミハラが化け物に目をやると目玉は明後日の方向へ向きまた機械音が鳴り響き光が

収束、発射された。

「な……はっ……」

ミハラは言葉がつまり、光の先、この国の城へと目を追う。

城はくり貫かれたかのようにポツカリと穴が空き燃えている。

あの城には国の王であるシハンがいたはずだ。

「に、逃げろおおおおお!!」

一人の男が叫ぶと皆は一斉に走り去っていく。

肩がぶつかり倒れる人、それを踏み潰す人、子供を助けるため盾になっている親、こ

こにいる者全てに混乱が起きていた。

「わ、私は……何を撮ったんだ……?」

ミハラは未だ呆然と立ちすくみ無意識に撮った写真に問いかけた。

また光が収束し瞬時、人が消えた。

あれは他国の兵器? それとも新たな魔物? いや、あんなものはこの星にある物ではない。
い。

ミハラは疑問を持つがあつたあの男の言葉が甦る。

『神の使者』と。

これは我々と神の使者との戦争の幕開けを私は撮ったのだ。

接触

「何が起きたんだ？」

パーパルディアア皇国監察軍東洋艦隊所属の竜騎士レクマイアは懲罰のためにフェン国へ向かうが視線の先に煙が立っているのに違和感を覚え眩く。

この日はフェン国の軍祭であり多くの武官が集まる日である。

そんな日に煙が多数立ち込めているのは事故でも起こしたのかと思ってしまう。
「事故か？反乱か？何があったんだ？」

監察軍ワイバーンロード部隊20騎は、港に近付きながら上昇し辺りを見渡す。

煙の発生源は城、街、港に停泊中の船と各地で発生して自らの視界に写るものは破壊し尽くされており反乱ではなく襲撃にあったかのようにも見える。

「隊長！あれは何ですか!？」

僚騎であるケルクが指を指し大声で叫ぶ。

指差す先には3本の民家よりも大きな足があり頭はバツタのような形と眼、そして下部には三つの蠢く触手のようなものがあった。

全高はフェンの王城よりも遥かに高い。

「なんだあの巨大な兵器!? いや生き物か!？」

あまりにも規格外すぎて一瞬思考停止をする。

始めて見る物で兵器なのか生き物なのかわからない物が我が物顔で歩いているのだ。

『こちらワイバーンロード隊、フェンへの奇襲は先を越された。フェンは壊滅状態である』

魔導通信機を手持ち後続で来る監察軍艦隊に連絡を入れる。

この連絡を入れても艦隊は恐らくこの区域に入るだろうがそんなことよりもこの得体のしれない物が気になる。

「いったい、何なのでしょう、あれは……?」

「分からん。我が国のものでないことは確かだ」

「味方……なのでしょう。我々よりも先にやってくれたのですから……」

そうであるのならいいがどうにもそうにも見えない。

あの得体のしれない物は我がパーパルディア皇国のものでもなく、フェンの隣国のガハラでもない。他国の兵器でもないようだ。

ただなんとも表現したがいものがレクマイアは感じた。

ただの直感であるが。

「帰還するぞ。我々の仕事は終わった——」

有無を言わさない口調でレクマイアが言った時、唐突に起きた。

得体の知れない三脚の物体の口から蒼白い閃光が走ったと思っただら近くにいたワイバーンロード一騎が墜ちた。

「なっ!？」

悲鳴に近い声を出す。

世界最高峰であるワイバーンロードが不意打ちとはいえ一瞬で墮とされたのだ。

背筋が凍る。

あれは確実に兵器だ。生き物ではない。

同じような現象が三回起き四騎目が損失した時、生き残っているワイバーンロード一騎がその兵器に向け突進した。

「い、いかん！待て！『攻撃中止！攻撃中止！』」

魔導通信機を使って連絡するがもう遅かった。

先程の光でまた一騎、一騎と墜とされ消滅させられていく。

今まで一部だけ被弾してたからか身体の一部だけ残っていたのだが光に呑み込まれた僚騎は跡形もなく消滅させられた。

魔導通信機を聞き取れたのか残りの6騎は上昇し兵器の周りを旋回する。

残りは、14騎だ。

最強のワイバーンロードが6騎喰われたのだ。

「た、隊長！どうしますか！」

ケルクが叫び指示を待つ。

一瞬とはいえ6騎墜とされたのだ。

どうするか、考えていると手が震える。

ビビっている？たかが一つの兵器に？

こちらは最強のワイバーンロードを持っているんだ。

『攻撃をする、まずは頭、顎、足の順に攻撃せよ！』

『了解！』

レクマイア含む8騎、旋回して待機している6騎が攻撃を開始する。

まずは6騎のワイバーンロードが頭部へ導力火炎弾を放つ。

6個の火炎弾が飛翔し、兵器がワイバーンロードに向き光を放つ。

2騎がワイバーンロードの翼を光線に貫かれ墜ちる。

それと同時に火炎弾は着弾し煙をあげた。

「ば、馬鹿な！石頭なのか!？」

攻撃した竜騎士は声を荒げて言う。

被弾した頭部には延焼するどころかコゲ跡はなく銀色に輝いている。

あの頭部は石か金属か、燃えない物体で構成されているようだ。

4騎はそのまま下へ潜り込み次は顎下の触手三本に火炎弾を撃ち込む。

火炎弾は触手に当たって燃え上がり痛みを感じ取ったのか振り回し3騎を掴みとり地面に叩きつけて地面に血をペンキのように撒き散らす。

回避した一騎はそのまま低空で飛びつつ後ろへ目を向けた。

頭部へ攻撃した火炎弾の煙は消えており効果は薄い。だが顎下の触手は着弾した一本は燃えておりまだ悶え苦しんでいるように見える。

弱点は顎下の触手だ。

『こちらケルス！触手は弱点である！』

一騎生き残ったケルスは魔導通信機を使い連絡をする。

それと同時に同じように低空で入れ違う形で8騎が兵器へ近づく。

「よし！まずは足の間接を狙え！次は弱点である触手だ！」

4騎に別れ左右に回る。

間接部位に狙いを定める。

「放て！」

火炎弾が膝と見られる箇所と頭部との付け根へ発射される。

発射と同時に上から触手が叩きつけてくるがレクマイアは避ける。

お返しとばかりかレクマイアのワイバーンロードは至近距離での形で火炎弾を発射し触手が燃え上がる。

「よし…このまま上手くいけば！」

レクマイアは触手の他に火炎弾を放った足の間接や頭部との付け根へ目をやると着弾したが燃えておらず効果は薄いと見られた。

この兵器を破壊するには触手部位しかない。

しかし気がつけば回りには5騎しないない。

このまま続ければ全滅してしまう。

「倒せるが倒せない状況か……！」

ワイバーンロードが息切れを起こしている。

魔力切れだ。

ワイバーン種は離陸、移動攻撃全てに魔力を消費する生物だ。

ワイバーンロードは品種改良をしており通常より燃費が悪い。

相手の触手は二本燃え尽きており使いものにならないだろう。

あと少し！あと少しなのに！

倒せるかとも思っていたが時間がない。

刺し違えてもいいが倒せる保証はないしこれ以上の損耗は無意味だろう。

命を投げ出すか生き残ることを優先するか……

「……くそ！ 『攻撃終わり。全騎帰投せよ。謎の巨大兵器は健在なり』」

レクマイアは生き残ることを優先し無念の魔導通信を行い全騎へ伝達する。

後続の艦隊や本国は傍受しているだろう。

この後の我々の処分はどうなるだろうか。

魔力切れで帰投せざるを得ないが残っているのは僅か6騎である。

処刑か左遷か、いや今は生きてることに感謝しなければならぬ。

巨大な兵器に背を向け本国へと向きへ帰るレクマイア達。

後ろからの不意打ちにかけられるのかと心配するが攻撃されることはなかった。

あの兵器は一体なんだったんだろうか？どこの国の兵器だろうか。

頭の中で思考を巡らすレクマイア達5騎と合流するケレス騎1騎の計6騎は魔力が

尽きないことを願いながら本国へ向け帰投した。

これがパールディア皇国と侵略者との初めての交戦となった。

壊滅

提督ポクトアールはフェン王国から約50 km離れた海上で、東の水平線を睨んでいた。

このまま進めばパーパルディア王国監察軍東洋艦隊22隻は約2時間後にフェン王国の首都アマノキに到着する見込みだ。

「一体どういふことだ？」

ポクトアールは魔導通信によって送られてきた報告に頓狂な声をあげた。

『こちらワイバーンロード隊、フェンへの奇襲は先を越された。フェンは壊滅状態である』

という通信だ。

先に発ったワイバーンロード隊がフェンへ侵入したのはいい。

だが先を越されてかつフェンが壊滅状態というのに疑問を持った。

「そのまま解釈すれば我々よりも先に攻撃をした者がいる、ということになります」

副官がそう答えた。

パーパルディア王国のほかに攻撃する組織となると隣国に位置するガラハかそれと

もクワ・トイネ公国とクイラ王国を滅ぼしたロウリア王国……いやロウリア大王国という名前になったか、そいつらの可能性がある。

ただそうなるトイバーンが飛んでいるはずだからすぐにわかるはずだ。

「我々が知らない敵……か？」

次の通信ではこうだ。

『攻撃中止！攻撃中止！』

突如となる何者かへの攻撃を止める命令。

『攻撃をする、まずは頭、顎、足の順に攻撃せよ！』

『了解！』

この通信でさらに困惑することになった。

「どういうことだこれは？」

ワイバーンからの攻撃であればこのような部位を指定するような命令は出さない。

それに攻撃中止させておいてすぐに攻撃開始するという気の狂ったような命令。

通信兵によればこれらは龍騎士隊長レクマイアの命令だそうだ。

彼なら冷静な判断を下せるはずだ。

もしこれが冷静であるなら……

「フェンでは何か生物が暴れまわっているということか……」

最後の通信はこうだ。

『攻撃終わり。全騎帰投せよ。謎の巨大兵器は健在なり』

巨大兵器……彼らが持ち帰った情報はこれだけだ。

戦っていたのは生物ではなく兵器、第三国からか。列強どもかロウリアの新兵器か。

「巨大兵器がどの国のものか知らないが我が軍の敵ではないわ！全速前進だ！」
『風神の涙』によりマストの帆は更に張上げフェン王国の首都アモノキへ進む。

「あれが兵器だというのか……!!」

およそ7km離れている位置からアモノキから大量の黒煙が空へ舞い上がり城が半分ほど消し去られているのを確認。そしてその城の倍ほどの大きさを持つ異形の物体。昆虫のような頭を持ち大きな三脚が地面を踏みつけている。あれがワイバーンロード隊と接触した兵器。

大きく、この世とは違う世界で生まれた存在かと思ってしまう。

「ワ、ワイバーンロード隊が苦戦するほどの相手です。どうしますか？」

副官が声を震わせ後ろにいる水兵も震え上がっている。

ポクトアールは単眼鏡で兵器を観察し、とあることに気付いた。

動きが鈍い、と。

「鈍いな、あんなものでワイバーンどもはやられたのか。近付き次第砲撃して潰してくれるわ」

22隻は速度を上げ港へ近付く。

兵器は以前鈍く周辺を歩いており、まだ気付かれてないようだ。

更に近づき2・5 kmほどになったときに突如兵器は動くのを止め此方に振り向いた。

「今更気付いただと?」

不審に思ったポクトアールだったが突如兵器の先端から光線が発射され最前線に位置するパオスに直撃、瞬間大爆発を起こし爆風が艦隊を襲う。

「なっ……!!?」

「せ、戦列艦『パオス』ば、爆沈!!」

ポクトアールは汗を吹き出し、揺らされてる中パオスが居た方向を見る。

パオスは謎の光線に当てられ瞬時破裂したかのように爆発した。恐らく中に積んでいた砲弾や風神の涙等の魔導石が爆発したのだろう。そうでなければパオスが木っ端

微塵にならない。

退艦すらもできなかつたのだ。悲鳴を上げることなく乗員は散つたのだ。

「なんたる威力だ！」

「ガリアス爆沈！」

およそ30秒ごとに光線が一隻一隻に向けられ、逃げることも避けることも出来ず爆発消滅し、悲痛の叫びが艦隊全体を襲う。

残るのは……8隻のみだ。

「く！全速前進！やつに近付き叩き込め！」

このまま立ち往生しても全滅するだけ、逃げようにも必中の光線に当たり大爆発、ならば此方の必中の距離まで近付き叩くのみだ。

近づく合間に3隻は順番に光線の餌食になり爆発を起こす。

「面舵いっばあい！左舷全砲門開け！」

ポクトアールが号令をかけ艦隊は右へ舵を取り左舷の魔導砲を展開する。

「……撃て！」

距離は1.5 kmで合計280門の魔導砲に魔方陣が展開、火を吹き砲弾が飛翔する。十数秒、兵器の足元に数えられないほどの土煙が吹き上げられ足元は見えなくなる。

一目見て命中したかといえば言えるわけもなく兵器は以前立ったままだ。揺れない倒れないということは足にも当たってないだろう。

お返しとばかりに兵器の光線はとなりの戦列艦に当たり爆発、爆風がポクトアールらに襲いかかる。

「め、命中せず！」

副官は悲鳴の声を上げ爆風に煽られ転倒する。

「あのバカデカイ凶体に当てられないのか!!撃て!撃て!」

次はこちらではないか、そんな恐怖がポクトアールだけではなく全員に伝染し無我夢中、盲撃ちをする。

しかしながら全て足元に落ち有効打にはならなかった。

「て、提督!あとは我が艦しか居ません!」

副官が悲鳴を上げる。

周りを見ると僚艦は居らず海面にはその残骸が漂っていた。

次は確実に我々の番だ。

「撃て!」

魔導砲の砲口に魔方阵が展開、魔術媒体が爆発し砲弾が飛翔する。

これが最後の攻撃となる。当てなければ死、それだけではなく一発も当てることもで

きない、栄光あるパーパルディア皇国に泥を塗ることになる。

数秒後、ポクトアールはこれまでにはない、珍しい生き物を捉えたような歓喜の表情を表した。

砲弾は足元と兵器の頭部と思わしき部位に大量に着弾、砲弾は炸裂し黒煙は兵器を包み込む。

手応えありと見た。

「め、命中！命中！」

「うおおおおお!! やったぜ！」

「ざまあみやがれ！」

副官と水兵は歓喜の声をあげ兵器に向け罵倒する。

「どうだ！これがパーパルディア皇国の力だ！万歳！万歳！万歳！」

ポクトアールは最後の意地を見せてつけ謎の兵器を粉碎させた実感を持ち祖国への万歳三唱をする。

水兵も同じようにする。

「それにしても……残っているのは我々一隻のみか」

ポクトアールは再度周りを見渡す。

あの激戦、いや虐殺とも言えるだろうあの戦いに生き延びたのは一隻のみ。

兵器から発する光線は必中で一隻一隻何もできずに葬られたのだ。今回は運が良く全滅は免れた。

「未知なる敵だったのです。ですが倒しました。このことを本国へ知らせましょう。私たちは英雄ですよ」

「ふっ、英雄か……ハッハッハッハ！」

ポクトアールは本国へ戻り国民が歓迎され王からの褒美を貰う。そんな妄想をしつつ既に倒れてるであろう兵器の方へ見る。

彼の妄想はすぐ打ち砕かれた。

「な、なんだと!？」

兵器はまだ立っており巨大な頭がこちらに向く。

あれほどの砲弾を受けても倒れることもない。

ポクトアールは青ざめた。

「ば、化け物め……」

一体どこの国の兵器だ、ムーか？神聖ミリシアル帝国か？いや違う。古の魔法帝国？違う、私の直感では古の魔法帝国でもない。この得体の知れない兵器は——

ポクトアール、そして兵器を倒したと勘違いしており最期まで気付かなかった水兵らは光線を浴び砲弾、魔導石が膨張、大爆発を起こし何が起きたのか理解することもなく

この世から一欠片も残さず消え去った。

こうしてパーパルディア皇国監察軍東洋艦隊は消滅したのだ。

絶望

変わりつつある情勢 1

中央暦1936年9月28日

「なんだこれは!？」

パーパルディア王国第3外務局に所属するカイオスは、フェンにおける懲罰的攻撃の結果報告を聞き、脳の血管が切れるのではないかと思われるほどの怒りを表していた。

およそ1ヶ月前、フェン王国が皇国の領土割譲案を拒否した会談の挑発的な態度への報復とパーパルディア王国の威信の下、パーパルディア王国第3外務局所属の皇国監察軍東洋艦隊22隻と、ワイバーンロード部隊2個小隊計20騎が派遣された。

ワイバーンロード部隊により、フェン王国首都アマノキに攻撃を行い、フェン人に恐怖を植え付け、軍祭に参加している文明圏外の蛮国武官に力を見せつける。

そして、艦隊による無慈悲な攻撃により、アマノキを焼き払い、パーパルディア皇国に逆らったらどうなるのかを他国に見せつけるはずだった。

結果は惨憺たるものだ。空襲に向かったワイバーンロード部隊は、6騎だけ生き残り帰還し東洋艦隊は消息を絶った。

何が起きたのかは不明だが、おそらく全滅したのだろう。

これについては当初、ガハラ神国の風竜騎士団が参戦したのではないかと疑われていた。

しかし生き残った龍騎士の言い分では、ガハラではなく国籍不明の兵器が攻撃してきたというのだ。

その兵器の詳細は、

○巨大な昆虫のような頭部とそれを支える三本足の金属製の兵器。

○兵器の動きは遅いが攻撃方法は主に謎の光線によるものであり、威力はワイバーンを消し炭にするほどで命中率は百発百中である。

○魔導火炎弾で攻撃しても無傷であった。

「馬鹿馬鹿しい報告だ」

これらの報告でも、兵器としておかしい部分は多々ある。だいたいなぜ昆虫の頭部をしているのかだ。

どうせあいつらは魔物と見間違えたのだろう。

(いや、もうやめよう。この報告はどうせ負けた言い訳だ)

生き残ったワイバーンロード隊は命令に逆らったため、独房へぶちこんでやった。

「くそつ、このこと皇帝陛下にはどう説明すればいいんだ」

昆虫の頭部を象った三脚の兵器、強固な身体、高威力の攻撃と命中率。古の魔帝でも復活したというのか？

負けたことと、このことを皇帝に報告すると考えたなら、ストレスで腹に痛みが襲いかかる。

(いや、恐らくどこかの列強が関わってるはずだ。まずはそれを調べ、後でその国を攻め滅ぼしてやる)

第3外務局カイオスは、裏で引いてるであろうその列強を調べるために情報収集を開始した。

中央暦1639年11月11日午前

第二文明圏の列強国ムーにある情報分析課に、また新たな悩みの種が降ってきた。

前日にはグラ・バルカス帝国の超大型戦艦グレードアトラスターの写真を見て絶望し、次はフェン王国へ行っていったジャーナリストが撮った写真を見て更に絶望へと貶めた。

「なんだ……この兵器は!?!」

ジャーナリストが撮った写真は、巨大な円柱、そしてフェンの港が燃え上がり、そびえ立つ巨大な三脚の物体が写っている物だ。

「この兵器……と言えるのか?これがこの円柱から出て来た。これは輸送目的とした円

柱なのか？」

ジャーナリストが帰国したのは一週間前。フェン王国から突如帰国して、新聞社に赴いたが、その時何が起きたのか話を聞いてもらえなくて、次は政府へ訴え情報分析課に流れ込んだのだ。

半信半疑で彼の話聞いたが、整理すると、

○円柱は宇宙（空より遙か高い空間）から飛翔してくる。

なおこの円柱は金属製である。

○円柱から出てきた三脚の怪物は強力な光線と思われるもので町を焼き払い人々を虐殺、町は壊滅状態になった。

○フェン王国軍は三脚の怪物と戦闘となったが手も足も出なかつた。

円柱、そこから出た三脚の怪物が暴れまわる写真、光線と思われるものをくらったのか身体がくり貫かれたかのような姿の死体、半分消え去ったフェン王国城、上空から撮ったのか王国軍が戦う写真等が机の上に散りばめられていた。

「嘘や合成では……ないな」

余りにも現実的ではないが、妙な悪寒を感じる。

怪物の大きさでも60メートルは下らない。

この世界にこんな怪物を造り、運用する国はあるのか。あるとしたら何処かの列強だ

ろう。

「もし本当だとしたらコイツはヤバイ。陸上だけではなく海上でも勝てんかもしれない」

金属で出来ている兵器では刀はおろか銃すらも通すことも出来ない。

牽引砲でなら対処は出来るかも知れないが、近すぎれば仰角(砲を上上げる角度)が足りない。

海上兵力でもラ・カサミでも届かないだろう。

航空機では50kg爆弾を当てれば効果を得られるだろうが、何回も当てないといけない。

それをするなら、全員がそれなりの錬度を持つてないといけない。

確実な破壊をするならもっと大きな爆弾を使わなければいけないが、爆撃機の搭載量が足りない。

せめて500kgほど載せれるものではないといけない。

つまりムー国の兵力では、この怪物に立ち向かえないということだ。

「上層部に報告しなければ……できれば新型兵器の着手もしなければ」

この写真と情報は遥か遠くの大陸から持ち込まれたもの。だがマイラスにはこの情報の脅威が、すぐそこまで近づいてきているかのように思えた。

変わりつつある情勢2

中央暦1936年10月3日

「待て、お前たち何者だ!？」

パールディア皇国のとある港町で兵士が不審船を見つけ、そこに乗っていた夫婦に問いかけた。

不審船は小型の帆船であり、夫婦の服装はかなりボロボロになっている。

見る限り海外から来た異邦人、難民だろう。

「お、俺たちはアルタラス王国から逃げてきたんだ! た、助けてくれ!」

「また難民か……」

兵士は溜め息を付きながら彼らを見る。

ここ最近アルタラス王国等の南方島国の文明圏外国からくる難民が多く流れ着き、彼等はその対処に当たっていた。

最初に来たのは9月26日の朝のシオス王国からの難民であった。

それから次々難民が流れ着き、取り調べをすると皆同じ台詞を言う。

『化け物が攻めてきた』と。

「ば、化け物が攻めてきたんだ！デカイ三脚の化け物と空飛ぶ魚が！」
ほうら、同じ台詞が出た。

『化け物』『三脚の化け物』『空飛ぶ魚』

この三つが絶対出てくる。魔物でも攻めてきたというのか。

「そんなもん聞き飽きた！お前たちはこれから收容所に連行する！」

「そ、そんな……」

「いや……ここまで逃げ切ったのに」

收容所送りは第3外務局からの指示であり、兵士はその命令通りに難民夫婦を連れてくために近づき、引きずり下ろす。

夫婦は青ざめ、一週間も漂流していた疲れがあり力が入らないため抵抗すらもできず、收容所へ連れていかれることになった。

このような出来事は今後も起こることになり、大量の難民が流れ着き大半は收容所や奴隷の運命に辿ることになった。

これを回避出来ているのは商船に乗ってきた貴族か商人、軍のみであった。

中央暦1936年10月5日

「なるほど、貴国はそんなことがあったのだな」

パーパルディア皇国パラデイス城の談話室にて二人の男が大きなソファアに座り対面で話をしていた。

一人はパーパルディア皇国皇帝ルディアス。

「嘆かわしいことだ、念願のロデニウス大陸統一を果たしたというのにすぐ手放す羽目になるとは」

もう一人はロウリア大王国の第34代目大王、ハーク・ロウリア34世。

ロウリア王国はパーパルディア皇国の裏からの軍事支援を貰い、その軍事力によりクワ・トイネ公国およびクイラ王国に宣戦布告。

圧倒的な国力の差を見せつけ両国を武力制圧し、ロウリア王国はロデニウス大陸を統一を果たした。

これを記念してハーク・ロウリア34世はロウリア王国をロウリア大王国へと改名することを宣言し、一時反政府勢力などの不安定があったものの安定していった。

しかし中央暦1936年9月20日、突如空から円柱が首都に落ち、そこから出てきたのは三脚の昆虫の顔を持つ巨大な化け物であった。その化け物は謎の光線を放ち瞬

く間に首都を焼き払った。

ロウリア軍は陸海空全てをもって対処をするが、化け物にはロウリア軍の武装でも足も出ず、ワイバーンでも『空を飛ぶ魚』とも言うべき化け物にも手も足も出ず、大陸は謎の化け物の手に落ちた。

突如の混乱により多くの国民は死に、または逃げ遅れた者が大勢おり、パーパルディア皇国に逃げ切れたのは政府と僅かな軍と国民のみであった。

「それは気の毒であろう。我が軍も先月そいつらにやられたという報告も出てる。最初聞いたときは嘘の報告かとおもったが、貴国の状況を聞けばどうやら嘘ではなさそうだな」

「ほう、貴国もか」

ルディアスはワインを飲み自軍とその化け物と交戦した報告経緯を軽く語る。

最初は滑稽だったが今ではそうでもなくなつたのだ。

そして化け物を作ってるのは伝説のラヴァーナル帝国もしくはそれを発掘した神聖ミリシアル帝国、その兵器だと思われてる。

「恥ずかしながらな。だが戦つたのは旧式を使っている監察軍だ。最新鋭を装備してる正規軍なら一捻りだ」

「それは素晴らしいことだ」

ルディアスのこの言葉は第3外務局の見解であり、自慢の軍ならばその化け物を倒せることを自負してる。

「……貴殿の頼みならロデニウス大陸奪還の支援を出してやろう」

ルディアスは立ち上がり窓から城下町を見下ろしながら、要望があれば参戦するとう。

これにはロウリア34世には驚きと歓喜の表情が出たが、ルディアスが振り向き、その表情を見てロウリア34世の表情が落ちる。

「だが対価は必要だ。何を出してくれるのだ？」

対価、参戦させるための対価をロウリア34世は考える。

人的資源か、国か……

「……穀物地帯の関税撤廃でどうだ？」

出せる物は妥協してこれぐらいだ。国なんておいそれ渡せれないし、奴隷を出すことも出来ない。

国土全て取り戻せたら無尽蔵に出てくる食糧でなら交渉のカードを出せる。

「駄目だな、その地の租借だ」

租借、つまり人と血を流した国土を貸すとは言えほとんどパールディア皇国の領土となるということだ。

期限は……言わずとものようなのだ。

「……わかった」

国土復興のためロウリア34世は苦虫を噛み潰したかのような表情で条件を呑み、ルディアスは笑みを浮かべた。

「くそ！誰も信じてくれねえ！」

裏道に置いてある木の箱を蹴り飛ばし、大きな音を立たせて崩す一人の商人がいた。

この商人はロウリア大王国にて商売をしていたが、突如化け物の襲来に遭い命辛々に逃げ延びた数少ない人物である。

そんな商人だが酒場にて南の文明圏外国はどうなっているのか、という話が持ちかけられており、商人はその生き証人として当時の地獄のような出来事を話したが、あまりにもおとぎ話すぎて誰にも相手にしてもらえなかったのである。

「……また手が震えてきた」

右手の震えが止まらない。酒ではなくこれはあの時の記憶が甦り震えているのだ。

まるで子供がアリを潰すようなあの遊びが受けられているような感であった。
早くこの場から遠ざかりたい。

あと数日したら神聖ミリシアル帝国へ渡航する予定だ。

「……随分流れ星が多いな」

震える手を押さえながら夜空を見上げると、そこには放射状に広がるように出現する大量の流れ星、流星群の姿があった。